研究

庄屋文書にみる西南戦争

―谷川村の「惣郎中大日控帳」による―

漆矢勘蔵
（本会会員・佐伯市青山字谷川）

一、明治十五年五月(注1)十三日縣(庁名)長官軍薩軍戦争有之黒沢大砦罷出たき出し小平山(おびらやま―地名)弥平治宅仕候　本営ハ日出光(ひでこう―地名)吉五郎方此トけい(注2)したい陸軍本営ハ東光庵　其節鮎うお大三貫鰹(ママ鰹カ)老メ之価三円三拾貫仕候　米白米六斗五升　同五月十三日より六月求方けが人(注3)丸市尾より持越一日に十八人十九人三日も持越　夫(注4)より七月十日十一日十二日過(庚カ)迄とけが人有之　其節も一日に付廿九人三十人位毎日丸市尾持中候　人夫(注5)債村より出夫老人前三拾貫被下相成申候　定夫は四十貫と五十貫被下候　尤も竹縄わら迄も惣面値段高値に被下候　其節金札之手形長札下け申候

これは谷川村庄屋（現佐伯市青山谷川区）吉郎兵衛、吉郎治二代（当主は漆矢重喜氏）にわたり「惣郎中大日和帳」と表題のある、厚さ約二糎和綴の帳面に、文化年間から谷川村の出来事を克明に認めた文書の中にある、西南戦争に関する記録である。同家は十二代谷川村の庄屋をつとめたといわれ、古い文書は漆矢家番母ツ子さんが所蔵されている。

当時石神柴攻略の基地であり、その渦中にあった黒沢にも記録は少なく、古老の口伝で戦争とのつながりを偲んでいたが、前掲の記録によって断片的に青山のおかれた状況を知ることができる。「青山と西南戦争」については先号は多田太郎吉氏の聞書（「佐伯史談」第二十七号所載）、また前号に山本先生が多田氏の聞書について研究発表をされているので、蛇足のように思えるが、前掲の庄屋文書について考察してみたい。

（註1）五月十三日は、増村宏生の「佐伯郷土史」に記載されている、薩軍が重岡仮分署を襲撃占領した旨が佐伯城下に知らされた日に一致しているが、官軍が何時頃黒沢に進駐したかは詳されていない。

進駐の時期については「佐伯郷土史」は、六月十二日まで佐伯城下は賊軍の制圧下にあったと記述されており、多田氏の聞書は田植あがりに進駐して来たとなっている点から類推するには、田植時期が問題である。青山地方の田植は夏至さ中心に行われる慣習があったことから、明治十年の暦によれば入梅六月十二日、夏至六月廿一日になっているが、世情の騒がしさに早目に植付を片づけたと考えると、六月二十日前後ではなかろうか。これは

（註3）「六月末にけが人丸市尾より持越」とあることからも、六月下旬にはすでに進駐していたはずである。「炊出しは黒沢大砦罷出」とあるが、ここは「黒沢に大砦罷出」と解すべきである。青山の各部落の女子衆は炊き出しに出役を命ぜられ、若い嫁が妊娠のため姑が替って働いたという話も多い。

（註2）「けいしたい」は東京警視隊萩原隊であろう。

（註4）の「けが人」は「西南役戦地事蹟報告、葛原浦報告」（昭和四十年「佐伯史談」第六号）に

一、旧六月二日午前六時頃、官軍当葛原浦ヘ侵入警視隊長萩原某日向国臼杵郡三河内村惣尾峠ノ賊ヲ撃ツ、賊戦ハズシテ走ル、互ニ死傷ナシ。全日官軍戦闘線ヲ当浦ノ内字ツルバ峠及ビツシマ畑（日向豊後ノ国

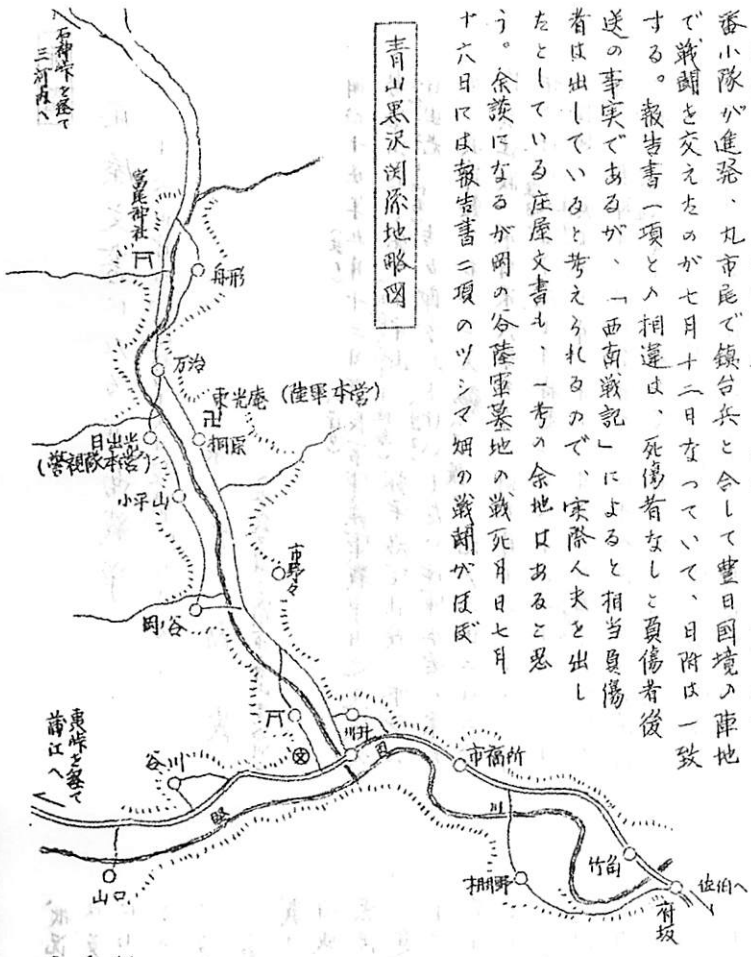
境）ニ計画ス。所々ヘ壘場ヲ築造ス。

一、全七日午前四時頃、薩軍ツシマ畑ノ官軍ヲ襲フ、官軍敗績ス。死傷五拾名余。賊軍死傷僅カニ拾八名余。

と誌されている。

この報告書と結びつけて見ると、旧六月二日は七月十二日と符合するが死傷者なし、六月七日のツシマ畑の戦闘は死傷者は多いが七月十七日になって日付にずれが出て来るが、柴田南華翁編「豊後西南戦記」では、石神峠の攻略は兒玉少佐が督戦、野田大尉指揮の下に、佐伯駐屯の広島部隊と警視小隊が協力して行われ、石神峠の敵と接触しながら三河内に入り、森将浦からは友隊警視二番小隊が進発、丸市尾で鎮台兵と合して豊日国境の陣地で戦闘を交えたのが七月十二日となっていて、日附は一致する。報告書一項と八相違は、死傷者なしと負傷者後送の事実であるが、「西南戦記」によると相当負傷者は出していると考えられるので、実際人夫を出したとしている庄屋文書も、一考の余地はあると思う。余談になるが岡の谷陸軍墓地の戦死月日七月十六日には報告書二項のツシマ畑の戦闘が該民

青山思沢渕関係地略図



一致しているように思える。

（註5）の人夫賃は、当時としては随分高い賃金が支払われている。これを又「西南役戦地事蹟報告書」と対比してみると「葛原浦報告書」旧五月十九日ヨリ二十一日迄三日間人夫ヲ賊ニ出スコト凡ソ二百人、其ノ役用ハ台場建築及荷物運送ニ係リ遠キハ五六里、近キハ二三里ニ達ス 皆賃金手段ニ出ヅ悉皆無賃」「丸市尾浦報告書」旧五月十八日ヨリ今月十九日マデ人夫ヲ賊ニ出スコト凡ソ百八十人余悉皆無賃但台場築立等ニ使役セラル」と誌されているように、旧名護屋村の人々は六月廿八日から三十日迄賊軍の制圧下で無賃出役の犠牲と強いられている。

が、夷峠を境にして官軍の兵站部的役割を果した青山は、同じ戦火の中でも好条件に恵まれ、明暗の度が甚だしかったことがうかがえる。

なお小平山には用度掛が止宿して「汐月友次氏宅の土蔵が金品糧米等の保管場所であった由で、同家に次の覚書が保管されている。

汐月常七

其方当用度係止宿中諸物品取締等別而注意致加之本月九日洪水之際架橋之節願ル盡力致候段御賞與可相成延進軍繁劇ニ付追而何分之賞取計ベクノ事

東京警視隊用度掛 太田

明治十年八月十九日

右の覚書が証明することは、官軍の思沢駐屯の終期である。再び柴田氏の「西南戦記」によれば、八月二日思沢口の攻撃から官軍は敗走する薩軍の急追に移ったものと思われるが、用度掛は八月十九日まで

で用務延理のため黒沢に残留していたことが判る。山間の秘境であった青山地区も、五月十三日から精神的な動揺をうけ、直接硝煙干戈の匂いを身近に体験したのは、六月中下旬から八月十九日頃にわたる二か月余であったことが、前掲の庄屋文書、後掲の用度掛覚書によって立証できると考えるのは独善であろうか。

以上数行の庄屋文書、なるべく明治十年太陽暦によって分析してみたが、資料引用等も妥当でない点も多いことと思われるので、先輩諸賢の御教示を仰ぎたい。

〈附記〉地名は地図参照おりたい。
人名　孫平治＝（汐月林業）汐月三代吉氏曾祖父、
吉五郎＝黒沢区当主後藤勘一氏の曾祖父、
汐月常七＝〃　当主汐月友次氏の曾祖父、
明治十年太陽暦＝川井区安藤負雄氏所蔵

（おわり）

研究

佐伯の港はどんな働きをしているか

―主として水軍の流通について―

大分県立佐伯豊南高等学校
教諭・同校郷土誌クラブ顧問
水会会員　市野瀬　仁

第二章　佐伯港

第一節　佐伯港の自然的環境

はじめに

豊南高校郷土誌クラブ部員は、昨年の春、「佐伯港の働き」をテーマにして調べるため、自然環境を三班に分けて着手し始めた。これが大体まとまったのち、港の歴史的変遷を調べようという提案に同意して、実際やってみると、私が一人でその任を負わねばならないことになってしまった。それというのもクラブ員は殆んど遠距離の生徒であり、女生徒が多かったし、聞きこみや調査に足を運ぶのに、同じ場所を六回、決ったように要したことを今ふりかえってみると、無理をさせずにすんでそれでよかったのだと思っている。そのかわり生徒は、小テーマの水軍関係を調べたり、港周辺の社会的環境の研究を続けて今日に至っている。従ってこれから綴る「港の自然的環境」は、第一章の「港の歴史的変遷」を調査する前に、生徒と共に調べたものを一年半ぶりに、この位置史談誌上に載せることになった次第である。ただ残念なことは彼女達が今春殆んど卒業してしまったので、この記録を見るのはもう忘れかかった頃になりそうなことである。

一、沿革

「寛文八年（三八〇年前）頃は女島、長島等は完全な島にして、蛇崎より木立の河川は海になっており、従って相江村が船付場となって荷役をしていた。一五〇年前に於ては西谷に御船蔵なるものがあって、この所を湾として荷役の積下しをしていた。現在もなお長瀬に接岸荷役の米倉は原型をとどめている。さらに文政年間一三〇年前から明治の初年にかけては、船頭町番匠川左岸に約一〇〇ヒ役の船が荷役をなしていた。後年